川越市立博物館

博物館だより

第３号

第４回企画展

美の先達者たち

～鏡にみる日本の美と心～

第４回企画展『美の先達者たち～鏡にみる日本の美と心～』は、平成３年６月１日（土）から６月30日（日）まで開催されました。

私たちの祖先は、弥生時代以来中国から鏡を輸入し、自らも多くの鏡を作り出してきました。現在では錆びて輝きを失ってしまった鏡がどんな人々の暮らしを映してきたのか、それを探るのが今回の企画展の主題です。

展示会は、県内外の古鏡110面と鏡に関連する資料13点に基づいて７つのテーマを設けました。

導入となる「古鏡の世界へ」では六鈴鏡と鈴鏡をつけた巫女の埴輪を展示し、企画展全体を流れる鏡のもつ神秘的な雰囲気を表現しました。

続く「鏡の誕生」・「王者の鏡」のコーナーでは、豪族たちの権威の象徴であった古墳時代の鏡を扱いました。三角縁神獣鏡や内行花文鏡、海獣葡萄鏡など８点の古鏡を展示しました。

「和鏡の誕生」・「いのりの鏡」では、平安時代から室町時代の和鏡と鏡を母体にした鏡像や懸仏などの信仰品も併せて展示しました。展示品には、桐竹鳳凰鏡、金銅春日鹿御正体、熊野十二社権現懸仏など６件の重要文化財があります。

信仰の鏡として「羽黒鏡の世界」を取り上げました。羽黒山頂の御手洗池には、平安貴族が奉献した和鏡が沈んでいます。出土した約600面の鏡のうち、重要文化財40面を展示しました。

重要文化財　金銅春日鹿御正体

最後の「埼玉の古鏡」のコーナーでは、県指定文化財長坂聖天塚古墳出土鏡をはじめ、県内の遺跡出土の古鏡21点を紹介しました。

会期中には、県内外から13,406名の方々にご来館いただき、改めて文化財に対する関心の高さを実感しました。

今回の展示にあたり、多くの方々にご指導、ご協力をいただきました。紙面を借りまして厚く御礼申し上げます。

市川 渡と「博物館」

〔1〕 はじめに

去る3月19日～5月12日まで、第3回企画展「松平周防守と川越藩」を開催した。

この企画の準備を進める中で、松平康直（後の川越藩主松平周防守康英）の従者として遣欧使節に加わった市川渡の業績を知ることができた。

今回、その人物像と日本における「博物館」という用語を巡る出会いの一端を紹介することとした。

〔2〕 文久2年の遣欧使節

文久元年（1861）12月、勘定奉行兼外国奉行の竹内下野守保徳を正使、神奈川奉行兼外国奉行の松平石見守康直を副使とする交渉使節団一行38名（日本を出発した時は36名で、ロンドンで2名が合流した）は西欧6か国に向けて出発した。彼等は目前に迫っていた江戸・大坂の開市及び兵庫・新潟の開港の延期を主な交渉目的としていたが、併せて西欧諸国の情報収集もその使命としていた。

当時の国内情勢は、嘉永6年（1853）のペリー来航以来、外圧に押されての開国へと大きく動いていた。安政元年（1854）には日米和親条約の締結、また同5年（1858）にはアメリカ・イギリスなど5か国との間に修好通商条約が結ばれた。この条約で日本は新潟・兵庫（神戸）などの開港と江戸・大坂の開市を取り決めた。しかし万延元年（1860）になると桜田門外の大老井伊直弼暗殺やアメリカ通訳官ヒュースケンの襲撃など、国内は尊王攘夷で大きく動揺した。幕府はこの情勢をとらえて5か国へ両市両港の開市開港延期を要請したのである。

この使節の副使松平石見守康直は後の松平周防守康英で、川越藩最後の藩政を担った人である。康直には2人の従者が一行に加わっていた。市川渡と野沢郁太で、ともに使節の旅行見聞記録を残した。市川渡の「尾蠅欧行漫録」と野沢郁太の「遣欧使節航海日録」がそれである。両者とも幕末日本人の西欧体験の記録として貴重なものであるが、とりわけ市川渡の「尾蠅欧行漫録」は優れたものとして注目されている。（芳賀徹著『大君の使節－幕末日本人の西欧体験』）

〔3〕 市川 渡について

川越市立図書館長の四元仰氏のご教示によると、遣欧使節に参加した松平石見守康直家来市川渡は、わが国の図書館史上注目される人物であるという。以下、後藤純郎氏の「市川清流の生涯－『尾蠅欧行漫録』と書籍館の創立－」によって市川渡の事蹟をみてみることにする。

わが国の近代図書館のはじめである文部省の博物局書籍館は明治5年（1872）4月に創立され、8月に開館した。この書籍館の設立の動機のひとつに市川清流の建白書「書籍院建設ノ儀ニ付文部省出仕市川清流建白書」があったとされている。この市川清流が松平康直の従者として遣欧使節に参加した市川渡その人である。

市川渡は名を皐といい、後に清流と称した。文政7年（1824）の生まれであるが、出生地や生い立ちなどは不明である。彼はいつの頃からか幕末の外交家岩瀬忠震の家臣となったが、文久元年（1861）主家を失った後、どの様な事情かは不明であるが松平康直の従者として遣欧使節の一行に加わっている。その後明治2年、維新政府の大学、後の文部省に中写字生として奉職し、翌年に大写字生に昇進している。明治4年文部省が設置されると、省内の編輯寮に出仕した。明治5年前記のとおり書籍院建設について建白書を提出し、博物局書籍館が開催すると

その館員の一人となったが、まもなく編輯寮にもどっている。明治5年9月文部省の編輯寮が廃止されるとその仕事と職員は太政官正院に移り、それにともない渡も移っている。その後退官して東京日日新聞に入り校正主任となったが、1年ばかりで退社している。明治11年には2冊の辞書を校訂、編集して刊行しているが、それ以後の経歴についてはよくわかっていない。

〔4〕 「尾蠅欧行漫録」と「博物館」の名称

『東京国立博物館百年史』(東京国立博物館刊　昭和48年)によると、市川渡の「尾蠅欧行漫録」中にでてくる「博物館」の語が最も早い使用例だとしている。それは文久2年4月24日の条で、この日使節は大英博物館を見学している。その様子を市川渡は次のように記述している。(『遣外使節日記纂輯二』日本史籍協会叢書)

「四月二十四日　晴　今日御三使博物館ニ行カル　午牌後ヨリ馬車ニテ出寓東北ノ方行凡二十丁許　路傍ニ一大石造ノ巨堂アリ　正面ヨリ入レバ神仙裸体ノ人物石像数種ヲ置タリ　又頭ハ人ニシテ四足ノ像アリ　其他奇怪ノ諸像及断牌数十ヲ並列セリ…」

しかし後藤純郎氏の指摘の通り、その数日前の4月20日のリージェント公園見学の項に「禽獣園草木園博物館等ノ場ヲ官府ニ造リ置テ」とあるから、「尾蠅欧行漫録」の中で「博物館」という語が最初に使われたのはこの条になるであろう。

同じ松平康直の従者野沢郁太はこの大英博物館を「諸種古物有之館」といい、「博物館」の語は用いていない。しかし使節一行がオランダ、プロシア、ロシアと回り、各国の博物館を見学していくうちに「博物館」という語が次第に使用されていくことになる。野沢郁太の「遣欧使節航海日録」でも6月26日の条には、プロシアのベルリンで「今朝十時ヨリ博物館へ被為入…」と記している。この他の随員の記録でも「博物館」の名称が出てくることから、この使節の間では次第に「博物館」という語が共通の認識になっていったことが推測される。こうした中でも市川渡の博物館の記事がより詳しく、博物館等の目的を「博物ノ識ヲマス等裨益アラシム」る施設として適格に把握していることは注目されているところである。

ところが『日本博物館発達史』(椎名仙卓著　雄山閣)によると、万延元年(1860)の遣米使節がワシントンでPatent Officeを見学した際、一行の通詞名村元度が「当所博物館ニ到リ、其掛リ官吏ニ面会諸物一見ス」(『亜行日記』)と記録していることを述べている。名村はもともと函館奉行支配の通弁で、使節団のなかでは最も西洋の事情に通じていたと考えられる人物である。そうすると、日本での「博物館」という名称の最初の使用例は名村元度ということになる。

〔5〕 おわりに

「博物館」という名称は、万延元年の遣米使節の人によって初めて用いられ、文久2年の遣欧使節の人たちにより共通に用いられるようになった。そして福沢諭吉の『西洋事情』(慶応2年刊)などによって、その概念が一般に浸透したものと考えられる。その場合「博物館」という語も、「博物」という中国の古語で、広く事物について知るという意味の言葉に、建物を意味する「館」が結び付いて一つの言葉に定着したものと考えられている。(『日本博物館発達史』)その意味では「博物館」という名称は、ひとりの人が考え出した独自な訳語とは言い切れない言葉かもしれない。

(学芸員　大野　政己)

文久２年遣欧使節 写真(石黒 敬章氏蔵)左より副使松平康直 正使竹内保徳 監察役京極高朗 組頭柴田貞太郎

市川　渡　写真（石黒　敬章氏蔵）

「尾蠅欧行漫録」

（国立国会図書館蔵　第３回企画展図録より転載）

金靴屋の調査から

博物館の調査活動の一つとして、6月25日から27日まで、三光町にお住まいの谷嶋重太郎さんのご好意で、金靴屋（装蹄師）をなさっていた頃の様子を知る機会をえました。調査は、仕事場の実測図と個々の道具の記録を取り、さらに当時の体験談を伺うことができました。

金靴屋（装蹄師）とは、牛や馬の蹄鉄を打つ職人です。江戸時代まで日本では牛や馬に蹄鉄を打つことはほとんどなく、わらじをはかせていました。明治時代になると軍馬に蹄鉄を打つことが始まり、次第に一般にも普及するようになりました。そして、谷嶋さんの父親（文蔵氏）が荷車を曳く牛にも蹄鉄を打つことを始めたのは大正の中頃のことです。

谷嶋さんは、明治43年の生まれで、金靴屋だった父親の仕事を南校（現中央小）に通う頃から手伝い始めました。6年生の頃には、一人で釘をうてるようになり、そして日本獣医学校の工課を卒業して一人前となったのは、18才の頃です。

川越には6軒程の金靴屋がありましたが、牛の蹄鉄を打つことのできる職人はまれで、谷嶋さんの仕事場には、近在はもとより、日高、飯能、越生、大宮から八王子、清瀬、青梅など遠くからも牛の蹄鉄を打ちにきたといいます。多くは川越の市に荷を運ぶためにきて帰りに蹄鉄

仕事場　全景

装蹄師　谷嶋重太郎氏

を打ってもらったそうです。仕事場には牛用の枠場があり、その枠の中に牛をいれあばれないようにします。（馬はおとなしいので必要ないそうです。）まず蹄の先を谷嶋さん自身が考案した直蹄刀（ちょくていとう）や剪鉗（せんかん）で削ります。そして蹄にあうように蹄鉄を整えてから火で赤めた蹄鉄を蹄の裏にジューと押し付けよく足になじむようにします。そして蹄釘（ていちょう）で固定します。重い荷物を曳く牛や馬の足は特に蹄の故障が多くそれぞれの足の具合を見ながら蹄鉄をつくります。

足の病気で動けなくなり、屠殺場につれていかれそうな牛や馬の足を直した時が一番うれしかったと谷嶋さんは話しておられました。金靴屋とは牛や馬の足の医者でもあったのです。

大正10年頃から終戦まで、夜寝る暇も無いほど忙しかった仕事も耕運機やトラックの出現で牛や馬がみられなくなるとともに減り続けました。昭和30年代には、蹄鉄を打つ仕事はほとんどなくなり、乳牛の爪切りの仕事に限定されるようになったとのことでした。

今回、谷嶋さんの協力のもと、川越で活躍された職人さんの仕事をお知らせすることができました。改めてお礼申しあげます。

（学芸員　本多　敦子）

学校教育と博物館(2)

第６学年社会科の授業に生かした博物館活用事例

博物館は、その事業を行うに当たっては、土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助しうるようにも留意しなければならない。（博物館法第３条第２項より）

「指導計画の作成に当たっては、博物館や資料館等の活用を図る…」これは、小・中学校新学習指導要領社会科の「第３指導計画の作成と各学年の内容の取り扱い」の項に明記されている内容です。

このことは、社会科教育のねらいにせまる効果的な方法であるばかりでなく、川越市の市民憲章のひとつ「郷土の伝統を大切にし平和で文化の香りたかいまちにします。」の具現化に向けた取り組みと考えてよいでしょう。

川越市教育委員会では昨年度に引き続いて小学校社会科教育課程実施の効率化を考え、バスによる送迎を組み入れ、「社会科教育における博物館活用」を実施しております。

活用に当たっては、社会科の教育課程に位置付け、学習指導のねらいを、社会科で育てる能力目標のうち「関心・意欲・態度」にポイントを絞りました。今回は、市内小学校６学年を対象にした社会科における博物館活用の実践事例を紹介させて頂きます。

実施に当たっては、博物館側の計画案を現場の先生方と事前研修し、意見交換、修正等を行い共通理解を図るようにしています。なかには家庭訪問を終えて来館され、学年主任の先生を中心に、熱心に研修された学校もありました。

今回実施した内容は、下記の博物館セルフガイドを作成、活用し、教科書の資料、記述と博物館資料との同一性、類似性を発見することにより「関心・意欲・態度」を育てようとするものでした。さらには、各担任が児童に鎧を着せたり、ビデオコーナーを活用させたりして、博物館に対する一層の親しみと、自ら学ぼうとする意欲を育てようとした実践もありました。

実践の成果については、館内の学習活動の様子から次のような効果があったようです。

1．教科書と関連させた博物館セルフガイドの活用により学習活動の方法がつかめ、児童が資料に親しみを持ち意欲的に活動ができた。

2．歴史学習に生かせる博物館資料に対して教師側の認識が高まり、授業に生かす各種の視点が見え始めた。

博物館を活用したあと、学校から感想文を頂きました。その一部を紹介します。こうした成果を考えるとき、博学連携の積極的な教育活動の展開を、社会科のみならず各教科・領域においておこなう必要性を改めて痛感する次第です。　（指導主事　水谷　薫）

博物館セルフガイド

氏名

ワークシートを使って博物館の展示を調べてみよう。

1　狩りや漁に使った道具は？

教科書Ｐ１０上写真を参考に博物館ではどんなものが展示されているか調べよう。

2　古墳とはどんなもの

古墳には大きさ、形などいろいろあります。代表的なものに前方後円墳があります。市内では、牛塚古墳（的場）が代表的です。これらの古墳からはいろんなものが出土しています。どんなものが出土したでしょう。

武器　　装身具

古谷小　６年　渋谷　綾子

博物館を見学して

渋谷　綾子

川越には、いろいろ昔のことがわかる博物館があって、とてもうれしいです。なぜならすぐ博物館に行って調べたいときに近くになかったら思ってもせられないと思います。赤いてでも行けば博物館が出きてから利用するろ人も多く、みんながよろこんでくれていると思うよね。

中には、いろいろな昔のことを調べるのに近くだと別がたくさんありますが、大人から子人まで使えて楽しいビデオコーナーなどがあり楽しいてオ・大用貴かんでは、昔のゆう名人のんのことがわかりとても便利だと思っています。家セっ風呂をでは、お城にんにいろと聞きました。てのおかげで、たんけんケームなどが早く終わりました。また、冷房完備みんなで行きたいと思っています。だから、またやさしく出からないことを、いろいろおしえてください。

社会教育と博物館(1)

学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術又は文化に関する、諸施設と協力し、その活動を援助すること。（博物館法第３条第１項より）

今回から、社会教育活動と博物館の関わりについて事例を紹介しながら考えることとしました。このことが、各種社会教育機関との連携の手掛りとなり、「川越市社会教育施設の体系」の具現化につながれば幸いと思います。

〔１〕 人材出前博物館

「市内高階公民館ですが、高階地区と関連させた川越の歴史・文化を学ぶ講座を計画したいのですが…。」

「浦和市立北公民館ですが、「ふるさと埼玉を知る」講座で是非川越まつりについて学びたいのですが…。」

昨年３月の開館以来、市内外の公民館等からこのような以来が多く出てきました。当博物館では博物館法の主旨にのっとり、今日の教育課題である生涯学習の推進に努め、可能な限り対応しております。

この対応に当たっては、館の教育普及係を中心に職員（学芸員）がそれぞれの館に出かけ受講生と共に郷土川越の歴史・文化を学ぶ機会としております。いわゆる「人材出前博物館」です。

〔２〕 出前博物館の活用を！

「出前博物館」の考え方は、決して新しい試みではなく、先進館の一つである大宮市立博物館でも学校対象に巡回展示を長年実施しており、上福岡市立歴史民族資料館では、この７月にも上福岡市西公民館において「平和（戦争）資料展示会」というテーマで実施されました。両市での試みは計画的、継続的に実施されており大きな成果を上げています。しかし、こうした企画は、とかく一過性のもので終わりがちです。

これが有機的に機能するためには、企画の段階で、関係機関とのネットワーク化を重視する必要があります。現段階では、関係機関とのネットワーク化と、事業計画の一貫性、一体性、継続性という視点での位置付けとなると、「今がスタート」という時期かと思います。これを推進するためには、公民館と博物館の連携を事業計画面からも検討を加え、相互の人材提供、展示資料の提供、その他の情報提供のあり方を共に考える組織づくりが大切かと考えています。

これについては、年度当初川越市教育委員会の公民館、図書館、博物館の合同館長、係長会議において、博物館側から提案させていただきました。

〔３〕 博物館で展示活動を！

昨年、中央公民館の事業「はりこの面講座」で、子ども達から大人までの作品を博物館のギャラリーで展示公開しました。

公民館の事業や公民館に登録されたグループの中には歴史・民俗に関するものが多く見られます。こうした活動の中で、その成果として展示活動を実施する場合、館内のギャラリーや特別展示室の活用も館の展示計画に照らし、共催という形で行うこともできます。

当館の課題である「開かれた博物館」、「市民参加の博物館」を推進していくためにも是非とも公民館との連携に努めたいと思います。

（教育普及係長兼指導主事　松尾　鉄城）

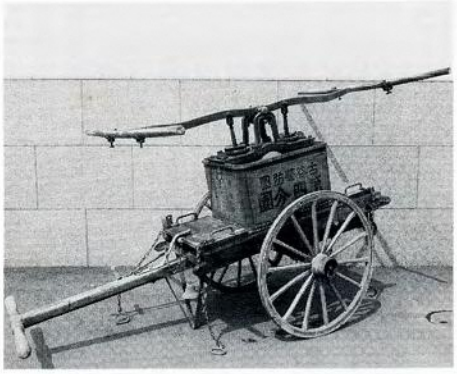
中央公民館「はりこの面講座展示会」（博物館ギャラリー）

●●●ただいま開催中●●●

第２回収蔵品展

会期　平成３年８月６日～９月８日

現在開催中の収蔵品展は、昨年度に引き続き当館に寄贈された資料を中心に展示を行っております。今回は市内久下戸にある奥貫家の土間などを部分的に復元し、台所を中心とした生活空間を再現しようと試みました。他にも、消防･養蚕･紡織･衣類など計８テーマを設け、昭和58年～61年に収蔵した資料を展示・公開しております。



資料寄贈者名簿

敬称略　順不同

62年	渡辺金次郎	岡部　貞三	森田　正道	山本　理肇	市立公益質屋
	須賀　幸夫	関　巳喜治	小泉　　功	前田　利子	岡安　道夫
	村田　長治	鯨井　裕康	戸田　志ず	島村　孝雄	岩沢　昭吉
	赤松　雨竜	大森　　久	清水　　稔	石井　欽二	根岸　貞吉
	関根　峰吉	岩田　利雄	加藤　孝治	松本　規好	
	高荷　亮助	有山茂喜次	岡田　忠久	佐藤　信子	

資料を寄贈いただき厚く御礼申し上げます。63年以降は次号以降でご紹介します。

ご寄贈いただいた資料は、今後「収蔵品展」等でご紹介させていただきます。

利用状況

	一般			団体			共通				その他		合計
月	大人	学生･生徒	児童	大人	学生･生徒	児童	大人	学生･生徒	児童	他館購入	招待	免除	入館者合計
4月	4,305	456	807	129	36	0	1,754	114	192	2,711	111	1,441	12,056
5月	5,683	595	873	725	20	0	3,213	331	315	4,330	136	10,120	26,341
6月	2,867	205	468	613	0	0	1,462	58	94	1,649	152	5,838	13,406

発行日　平成３年８月６日　　発行　川越市立博物館
〒350　川越市郭町２丁目30番１号
ＴＥＬ　0492-22-5399